船長の肩振り

田中善治

成山堂書店

船長の肩振り

江苏工业学院图书馆
藏书章

田中善治

成山堂書店

著者略歴

田中善治（たなか　よしはる）

昭和13年　山形県生まれ
昭和35年　国立富山商船高等学校航海科卒業，
　　日鐵汽船株式会社（現　新和海運株式会社）入社。
　　同社船長，系列会社出向などを経て，
平成10年　定年退社，（社）全日本船舶職員協会事務局長。
平成15年　同協会横浜支部事務局長，（社）横浜海洋福祉協会専務理事，
　　現在に至る。
　　海事補佐人。
　　神奈川県横須賀市在住

船長の肩振り

平成一六年四月二八日　初版発行

著者　田中善治
発行者　㈱成山堂書店
　　代表者　小川實
印刷　松澤印刷㈱

発行所　株式会社　成山堂書店
東京都新宿区南元町四番五一
（〒一六〇-〇〇一二）　成山堂ビル
TEL　〇三（三三五七）五八六一
FAX　〇三（三三五七）五八六七
振替口座　〇〇一七〇-四-七八一七四
URL　http://www.seizando.co.jp
E-mail　publisher@seizando.co.jp
Printed in Japan　ISBN4-425-94691-X

定価はカバーに表示してあります。

©2004

目　次

一　海で

肩振り　2
『蛍雪時代』　4
門出の日　兄に伴われて…　6
殴るということ　8
時計合わせ　10
インドの舞姫　12
卵の賞味期限　14
三等航海士の休日　16
利き酒　18
N甲板長の妻　20
A甲板手の涙　22
元航海士の憂鬱　24
不覚の入院　26
乗船官吏の帽子　28
エアーメール　30
「頼りにしています」　32
幻の動物園　34
散髪（ざんぱつ）　36
贅沢（ぜいたく）　38
最後の言葉　40
みの虫　42
鯨と競走した話　44
沖売り　46

二　陸(おか)で

このごろの私　50
祭り　52
アンコ餅　54
菊池先生　56
冬の花　58
初恋　60
母のクリスマス休暇　62
鍼(はり)　64
♬ ジャジャジャジャーン♪　66
言葉の力　68
ブリキ缶の中身　70
この一年　72
♬ 赤い靴　74
クラス会　76
安楽死　78
それでは皆さん、さようなら　80
「髪はカラスの濡れ羽色」　82
檜(ひのき)　84
青(あお)短気　86
わがまま料理　88
永田町にて　90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三　寄稿集

初乗船のころ　94
熊に出合った話　110
あほう鳥を蹴飛ばした話　118
ゴキブリを大量虐殺した話　123
山崎豊子著「大地の子」の読み方　134
新年の迎え方　153
霧　158
これでいいのかゴルフ狂　165
TIME IS ENERGY　169
「聞く」は「効く」　176
現代内航船員気質　179
海洋汚染　193

一海で

鉄鉱石専用船“富永丸”1966年著者撮影

肩振り

「オィ　メシ終わったか？　肩でも振っていけョ」

「何か面白い話でもあるのかョー」

こんな会話が日常だった。船員同志の取りとめもないおしゃべりのことを「肩振り」という。長い航海の日々、無聊の慰みに、出身地のことや寄港地で見聞きしたことなどを枝葉と尾ひれをいっぱい付けて、身振り手振りで、面白おかしくしゃべりまくる。聞く方も、どうせ話半分と高を括っているからお互い罪はない。その肩振りの席で…。

…この間神戸で、甲板長とそっくりの目鼻だちの子供を連れた妙齢の女性が、ガード下の小料理屋へ入って行くのを見た。あれは予て噂のボースンの彼女に違いない…そんな話が飛出した。皆色めき立って、その子は幾つぐらいだったかとか、彼女は和服だったか洋服だったかとか、そう言えば、ボースンは神戸入港の前はいつも鼻歌機嫌でソワソワしている…等々次から次へと推量と想像の世界が出来上がってゆく。真実は、ボースンとよく似た子供を連れた女性に出会った、というだけである。次航の神戸では、着岸したら真っ先に「トーチャン」と叫びながらタラップをかけ上がってくる筈だ、と誰かが尤もらしく

半畳を入れるころは、アルコールも手伝ってボースンも一緒になって笑い転げるのである。

生活環境からして、下ネタ系が幅を利かすが、紳士面して距離を置く御仁も、耳だけは肩振りの輪に参加している。

顎が外れる程の笑いをとった者は何回もリクエストされ「肩振り名人」の尊称を欲しいままにして、寝食を惜しんでお座敷をこなす。肩振り名人はどの船にも必ず居る。

思えば、一般社会から隔離されて、長期間男ばかりの生活の中で平穏無事に過ごすのは並大抵ではない。自己抑制と健康管理に費やす精神的、肉体的負担からくるストレスを、同じストレスを持つ仲間同志の馬鹿騒ぎによってリフレッシュする名案として肩振りが生まれ、その場作りに走り回るのだ。何時になく盛り上がった肩振りの翌日は、皆、優しいオッサンになっている。

陸（おか）のサラリーマン達が夜ごと赤提灯でくりひろげる「油売り」、情報交換や陰口などを話材とするあの「油売り」に似たケースも船内にはあるが、ここには笑いがなく、何となく暗い。それに比べて肩振りの明るさ。肩振りの盛んな船ほど船内の和は保たれていて居心地がよく、油売りの多い船は早く下船したくなる。今も折々思い出す、あの肩振り名人達、元気だろうか、と。

（平成一四年一月）

『螢雪時代』

高校入試を一年後に控えた中学二年の一二月、母が病死した。中学卒業後は、大半が就職する時代であり、山形の農家生まれの私には、大学進学など夢のような話であったから、専門学校を出て就職できれば上出来と思っていた。しかし、担任の先生のすすめもあり、曖昧なまま時間が過ぎて、気が付けば大学進学を志す者が集まる進学校に入学していた。家の中は母の死後陰鬱な空気が漂い、高校に入ったものの、とりたてて目標もなく毎日を空しく過ごしていた。

このような生活から早く抜け出して、何か目的に向かって集中したいと思っていた矢先、目に付いたのが新聞の広告欄に小さく出ていたM海員学校の生徒募集だった。豪華客船のイラストをバックに制服制帽姿の船員の横顔が凛々しい。私の脳裏に大海原を航海する船長の姿がくっきりと浮かんだ。「よしっ」と思った。そして、誰に相談することもなく、意を決して応募した。

冬の間だけ市内に下宿して通学していたクラスメートのところで、仲間数人とこたつを囲みながら、そのことを打ち明けた。そのクラスメートは、どうせ船乗りになるなら船長

を目指せ、それには海員学校よりもこちらの方がいい、と言って、彼が購読していた『螢雪時代』に、たまたまグラビアで紹介されていた国立の商船高等学校をすすめてくれた。それによれば、全寮制の修学五年で、卒業後は甲種船長の受験資格が得られるとあった。更に、今からでも応募手続きが間に合うことがわかった。船長への夢はますます大きく膨らみ、早速海員学校の方をキャンセルして、全国に五校あるうちで山形から最も近い富山商船高等学校へ応募した。

受験の前日、家の米櫃からそっと二升ばかり持ち出し、町の米屋の息子だったクラスメートにそれを買ってもらい、一次試験が行われる仙台電波高校への旅費とした。

郵送されてきた合格通知が父に見つかった時点で、家人や周囲の者にこれからのことを話した。二次試験は本校で行われるため、今度は父から旅費をもらい、丸一日かけて新湊に辿り着き受験した。あとでわかったことだが、わずか六〇名の入学定員に全国から三〇〇名以上の応募があったという。

昭和二九年一二月、雪に埋もれた友人の下宿で見せてもらった『螢雪時代』が、その後の長い船員生活の決定的なきっかけとなったのであった。

（平成一四年六月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

門出の日　兄に伴われて…

昭和三〇年四月、山形東高校を一年で止め、船員を目指して富山県新湊市にある国立富山商船高校に入学することとなった。入学式には父兄同伴となっていたが、父は長旅が苦手だし、母は二年前に病死していたため、一九歳の兄が付いてくれることになった。四月とは言え北国はまだ冬の装いであった。

北山形駅でオーバーを脱ぎ、ゴム長を革靴に履き替えた。生れて始めて履くオーダーメードの革靴に気が引き締まる一方、見送りの多くの視線に照れた。奥羽本線で発ち、北陸本線まで六線区を経由して翌朝富山駅に着いた。夜行の鈍行列車で一七時間余、二人共疲れ果てたが、特に兄はひどい乗り物酔いでフラフラだった。チッキで送っておいた布団を手荷物引渡所で受取り、新湊へ行く地方鉄道に乗り換えるため二人でその大きな荷物を持って歩いた町並みは途方もなく長く感じられ、苦しかった。町の中心地を走るその電車の乗降口に荷物が大き過ぎてなかなか入らず、車掌や乗客の顰蹙（ひんしゅく）を買ったが、二人で冷や汗をかきながらなんとかねじ込んだ。柔らかい布団であったことが幸いした。

新湊の駅に着いたものの、そこから学校迄数百米、再び二人でしびれる手を左右それぞ

れ持ち替えながら運んだ道のりは、これから始まるであろう未知の寮生活や、厳しい船員教育に心を奪われていたからこそ耐えられたが、兄にはただ苦難の砂利道であったと思う。

学校の正面玄関から革靴のまま板敷の廊下を事務室まで、到着の報告に行こうとして、学校のしきたりを知らない兄は、土足であがってはいけない、と兄らしい態度でたしなめた。窓口で、入学式は既に終了したことを告げられた。

指定された寮の一二号室に行くと、四人の新入生とその父兄を前に、三年生の室長が威厳の中にも礼儀正しく、早速始まる寮生活の諸々を説明していた。

皆の後ろで保護者代行の兄の顔色は冴えず、目は空ろだった。

荷物を解(ほど)きにかかると同時に、父兄は席を立った。やっとの思いで辿り着いた道程を二〇時間かけて戻らなければならない兄を気遣う余裕は、その時の私にはなかった。

（平成一三年一〇月）

殴るということ

最近テレビのトークショウを見ていたら、ゲストのプロレスラーが、同じくゲスト出演しているタレントの顔を殴るシーンがあり、びっくりした。何でも、気合いを入れるためとのことで、殴られた方は「ありがとうございました」と言っていた。何とも奇妙なシーンである。友人にそのことを話したら、そんなことは前からあって、CMでも流れており珍しがるお前の方が奇妙だよ、と言い返された。

昭和三〇年代の前半に、全寮制の高校で船員教育をうけた。入学してすぐ二年生から説教され「三年生は神様であり、二年生は人間である。貴様ら一年生は奴隷だ。日々の行動は迅速、確実、静粛。そして五分前精神を忘れるな！」と叩き込まれた。この教訓（？）に反することが見つかると容赦なく殴られた。しかも、二一時の消灯後に、真っ暗闇のグラウンドや講堂に呼び出されて「気をつけ！」の姿勢でやられるのである。自分に殴られるだけの理由があると自覚しているなら我慢もするが、いきなり殴られて「何で殴られたか反省しろ！」と言われても戸惑うばかりである。殴った方だって確たる理由がある訳ではなく、態度が悪いとか、奴隷だからというだけの、要するに鬱憤晴らしだったりする。

時には、歯が折れたり、難聴になったりして退学する者もあった。でも将来、厳しい環境の下で生活しなければならない船員となるための必要悪として、教官も黙認していた。

私は一回も殴られたことも、殴ったこともなく卒業した。どうして殴られなかったのかは今でも不思議だが、どうして殴らなかったのか、その理由はあの当時も今もはっきりしている。それは、相手の顔を殴るということは、相手の人間性と人格を否定する行為である、と思うからである。

だから、人間性も人格も未成熟な低年齢の成長期には、叩いたり撫でたりして豊かな人間性を自覚させることは、むしろ大人として当然のことだと思う。小学校に入学するまでは、祖父からも父や母からもゲンコツをもらったし、兄弟喧嘩もした。入学後、先生から最後に殴られたのは三年生の時で、ソロバンを忘れたからだった。しかし、そのことを微塵も恨んだことはない。

先生は生徒への体罰を禁じられ、一方、大の大人が、しかも公共性の極めて高いテレビで殴り、殴られている。異常な世の中としか言いようがない。

（平成一五年二月）

時計合わせ

地球が一回転するのに二四時間かかるから、一日は二四時間であることは誰でも知っている。しかし、一日が二四時間ではない世界で生活している者もいることは、あまり知られていない。それは、外国航路の船員や国際線の乗務員などである。

例えば、横浜港を出港して東行し、北米サンフランシスコ港まで約四五〇〇マイルを一四ノット半で航海すると一三日かかるから、両港間の経度差九八度（時間換算六時間三〇分）を一三で割ると三〇分、すなわち、毎日三〇分づつ時計の針を進めて一日は二三時間三〇分となる。そして日付変更線を通過すると日付は重複する。逆にサンフランシスコから横浜に向かうと一日は二四時間三〇分となり、日付は一日ジャンプする。（各国はそれぞれ標準時を使用しているので、正確にはもっと複雑な計算となる）この三〇分を調整する時間帯に、自分が就労中か、就寝中かによって、損した気分になったり得した気分になったりする。

私は昭和三四年、学生の身分のままM社のニューヨーク定期航路のM丸に六カ月間、実習生（アプレンティス　オフィサー）として乗せてもらった。横浜を出港した翌日から早

速時計合わせが始まった。朝八時に入直した三等航海士は、その日の正午位置を予測して何分進めなければならないかを計算する。私は八時半に昇橋し、調整された時間をストップウォッチに移し取り、まず船長公室と寝室の時計から始めて、各部屋を回って時計を順次進めて行く。深夜当直の者は就寝中なので、ソッとドアノブを回し、トーチランプを頼りに抜き足差し足で細心の注意を払った。時化の時などは、よろけて物音をたてやしないかと冷や汗ものだった。又、時計の構造を理解していないと、回す長短針に無理がかかり故障の原因となるので、緊張する一瞬でもあった。全て終了するのに三〇分以上かかった。

〇時から四時までの当直を終えてボンクにもぐりこんだのも束の間、八時過ぎに起こされての時計合わせは、それなりの集中力を必要とした。

M丸の時計はほとんど一週間巻きのものであったが、毎日ゼンマイを巻かなければならない一日巻きのものもあった。全部で三二個の時計合わせをやったと記憶していたが、先日、同時期に同型船に乗船していた先輩と、昔を偲びながら時計合わせのことを話していたら、なんと四〇個以上を数えることができた。

ちなみに今は、船橋からボタン一つで船内中の時計を一瞬にして調整することができる。

（平成一五年三月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com